

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

- (1) 名 前 : Mohamed Uvais Mohamed Ali Sabry
(モハメド・ウエイス・モハメド・アリ・サブリー) (スリランカ)
- (2) 年 齢 : 51歳
- (3) 参加事業 : 第8回「世界青年の船」事業 ナショナル・リーダー
(1995年度)
- (4) 職 業 : スリランカ国法務大臣



■ 参加のきっかけ

スリランカ・ロー・カレッジに在籍中の1992年から1995年の間、私は学生自治会の役員、ディベート、政治、文化活動など、多くの学生活動に参加していました。カレッジの最終学年である1995年には、青少年育成を目的とした政府の主要機関であるNational Youth Services Council (全国青少年サービス協議会、NYSC) のディレクターに任命されました。偶然にも、NYSC本部ビルは日本政府のご厚意により寄贈いただいたものです。当時、NYSCで働いていた私は、コミュニティ間の平和構築や、若者のスキルアップ、各国との国際関係に貢献できることがたくさんあると気づきました。そんな中、「世界青年の船」事業（以下、「世界船」と言う。）のを知り、応募しました。1951年のサンフランシスコ講和会議で、当時のスリランカ大統領が日本の復興について言及した時から、スリランカと日本は良い友人関係にあります。当時、日本はスリランカ人にとって人気の国の一つであり、「世界青年の船」事業は一般的に、そして特に若者によく知られているプログラムでした。スリランカ政府と日本大使館による選考を経て、青年20人で構成されるスリランカ代表団のナショナル・リーダーに任命されました。

■ 初の海外で日本へ

有難いことに、第8回「世界青年の船」事業（SWY8）のナショナル・リーダー会議に招へいされ、事業開始に先駆けて研修のため来日しました。来日前の日本の印象は自動車があるということを知っていたくらいで、本や映画で見聞きした内容が主でした。1995年10月、それは私にとって初の海外渡航でしたが、ナショナル・リーダー会議に続く交流事業においても手厚くおもてなしいたいただき、全くストレスを感じることなく、心地よい滞在をすることができました。鎌倉で大仏を見学し、豆腐を食べたことも覚えています。山梨のホームステイでは、ホストファミリーが富士山へ連れていってくれました。スリランカでは最低気温が20度という中で、初めて氷点下を経験し、あんなに寒い思いをしたことはなかったです。全てがとても美しい思い出として残っています。

■ 平和構築の可能性に気づく

第8回「世界青年の船」事業（SWY8）は、世界中から集まった約280名の参加者が、いくつかの大陸を横断して約2ヶ月間一緒に航海する総合的に行き届いたプログラムでした。参加を通じて、この事業が、いかに

綿密な計画とスケジュールをもって企画されたかを強く実感しました。このプログラムは、文化、信仰、地域、言語の異なる若者たちがお互いに交流し、考えを共有し、橋を架けるような機会を与えてくれました。このプログラムは10数か国が参加し、その半分が日本人、そして海外は西洋、東洋、アフリカなど多様な国からの参加があることが特徴です。そして、事業実施の1996年、南アフリカ共和国のケープタウンへ訪問した時には、ネルソン・マンデラ大統領が着任した直後でした。私たちの滞在したキャンプ施設へ大統領にお越しいただくことは叶いませんでしたが、国が多様性を歓迎し、過去を受け止めて新しいスタートをきっていたことがとても印象的です。

船内では文化、国々が混じり合い交流します。そこで私は、**参加青年は、国や文化の違いがあったとしても、共通して「平和、友情、繁栄」を求めていることに気づきました。**幼い頃にそれが大切と分かっている、大人になると忘れてしまったり、国と国の間で争いが起きてしまったりします。しかし、個人レベルでは、皆でよい人生を送りたい、と思っているのです。交流を通じて、**私たちは自然と、多様性は欠点ではなく恵みであることに気づかされました。**スリランカは、多様性をナビゲートすることにおいて、課題を抱えていると思います。日本では仏教や神道、そして無神論者もいる中で、自分の宗教を強く主張したりする動きはありません。スリランカは大きく分けても仏教、ヒन्दゥー教、キリスト教、イスラム教があり、「最も宗教的な国の一つ」として挙げられますので、常に宗教に関する課題があります。スリランカは過去30年、ある特定の民族が政府と戦うという内戦状態でしたので、そのような環境で育った私たちの中には、平和構築を目指す若者が多くいました。そして、私は、「**人々の大多数は平和を望んでいて、その平和を構築することは可能である**」ということを、乗船中何度も感じました。日本も、もちろん、戦後の復興を遂げた国であり、日本人の気質や、平和構築への態度において、学ぶべきことがたくさんあります。このように、船に参加できたことは、100万回に1回の特別な機会でしたし、今でもとても感謝しています。

■ 多国籍グループでリーダーシップを発揮

一つ、とても重要な要素として、船内では**各国のリーダーが多国籍のグループにおいてリーダーシップを発揮する機会が割り当てられていたことが挙げられます。**例えばイスラム教徒はラマダンの時期で、断食をしていましたし、パーティーへ行っても、セクシュアリティについて保守的な国から解放的な国まで様々な意見がありました。**自分の意見とは違っても、その場をモデレートする必要がありました。文化的に違う意見をまとめること、サポートすることは本当にチャレンジでした。**そして黒人の青年も白人の青年も参加していたため、当時撤廃されたばかりのアパルトヘイトに関しても異なる意見を持っていました。このマネジメントの経験はとても興味深く、忘れられません。

国ではなく、グループ間で競争する場面もあり、私が「J」グループにおいてリーダーシップを発揮した体験は、その後のイベントや、政府高官、民間企業のリーダー、外交官、上級弁護士、社会活動家、そして最終的には政治家や閣僚として**リーダーシップを発揮する上で、非常に大きな強み**となりました。そして日本から学んだことは、**計画の仕方**です。管理部が全て書き出し、事前準備をしっかりと、時間厳守、厳格であり謙虚だが主張もすること。そのうえで計画から実行に移すこと。国際的な舞台でそういった経験を目の当たりにすることが初めてだったので、自分のリーダーシップスタイルに影響を受けました。

■ 船事業であることの意義

船内活動は、希望する若者がさまざまなスキルを学び、知識を得て、考えを共有し、疑問を解消する機会を提供するように設計されていました。朝礼から朝食まで、決まったカリキュラムへの参加から自由活動まで、個性を発揮するグループ活動からクラブ活動まで、国ごとの魅力を最大限に伝えるナショナル・プレゼンテーションまで、

船内のコミュニティ全体と一緒に過ごすことが半ば強制されますので、**無意識のうちに互いの文化や価値観を学び、認め合うことができました**。船内で2カ月過ごすということは、途中で寄港地活動を挟むものの、朝から晩までスケジュールに沿った日常生活を送るということです。大変綿密に計画された活動の数々ですが、参加青年としてストレスなくスケジュールをこなしていくことができました。もちろんパーティをしたり、映画を見たり、図書室で本を読んだりという自由時間も与えられていますので、全員が船内での生活に順応できるよう準備されています。私を含め、イスラム教徒の青年の断食については、日の昇っている間は食事ができませんので、日の落ちた夜中の12時に船側で食事を用意してくださいました。船の運航により日の出と日没が日々変わることが大変でしたが、船というコミュニティの中の、一つのコミュニティにも、対応いただきました。こう考えると、世界船は「**グローバル・ビレッジ（世界規模の村）**」の複製版とも言えるでしょう。

■ 皆が成長のきっかけを掴んだ船事業

東京、シンガポール、コロンボ、ナイロビ、ケープタウン、ドバイ、そしてコロンボに戻ってきた約2カ月間、船内のコミュニティで過ごした後、私の世界観、価値観が大きく変わり、そしてすべての人の平和と繁栄に向けて尽力したい思いを強くしました。グループの中で、またスリランカ代表団の中で、ホームシックになる青年に対応することもありました。自分が最善を尽くしたつもりでも、相手の求めていることとは違った、ということもありました。全ては経験で、成長のきっかけになりました。大切なのは、レジリエンス（回復力）であり、どんな状況でも前進することです。**批評家ではなく変革を起こす側になることに努めました。私の中でリーダーとしての解決力や、「この状況で何をすべきか」と考えることにつながりました**。私はスリランカに帰国して、自分が**成熟してバランスのとれた、共感できる若者になっていた**ことに気づきました。私の価値観は、完全に変わったのです。

スリランカ代表団にいた青年たちも、海外渡航が初めての者が多かったですが、「外の世界に身を置く」よい機会を得ました。そして文化技能に長けている青年が舞踊を披露したり、ジャーナリストが海外とのネットワークを築いたり、という機会もありました。事業後に日本に住むようになった青年もいます。彼らの成長を端的に表現すると、このように新しいスキルやネットワークを得て、「**より視野の広い、人格者になった**」と言えるでしょう。**自分の国や文化に収まっていたら、他国の進化を見ることはできません**。1996年のスリランカと日本を比べると大きな違いがありましたから、スリランカ青年は、国がここまで発展できるということや、異文化の人たちとも仲良くなっている、世界は共存できるということを、十分に学んだと思います。

スリランカに戻ってからも、私はNYSCの青少年育成活動を継続して行いました。NYSCは各地の様々なユースクラブの育成活動を支える統括組織で、私はボード・ディレクターとして多様性を含め自分の世界船での経験を多くの若者に伝えて、プログラム企画や実施のサポート、全国イベント、彼らのスキルや思考パターンを向上させ、調和と平和に向けて取り組んできました。

■ 最年少で海外公館へ

スリランカに帰国してからわずか1年後、私はサウジアラビアのジェッダにあるスリランカ総領事の役職を拝命し、外交の任務に就きました。私は26歳で任命され、着任時に27歳でしたので、海外のスリランカ公館を率いる最年少の総領事でした。世界青年の船のスリランカ代表団のリーダーとしての私の経験と貢献が、1997年から2000年までのスリランカ総領事の任務にプラスに働いたと確信しています。その間、私はこの地域のスリランカ人コミュニティをまとめ、様々な支援サービスを提供し、コミュニティ・インターナショナル・スクールを設立し、両国の外交関係を再構築することができました。

■ 弁護士資格を生かした社会貢献

任期終了後、私はスリランカに戻り、弁護士として開業しました。また、スリランカ法科大学で講義を行い、多くの非政府組織でボランティア活動に従事しました。私は以前から社会貢献したいと考えていましたので、学校でもOld Boys Association（校友会）に所属していましたし、法学生時代も移民当時でもNGOで移民サポートの活動をしていました。世界船での経験を経て、**活動にもより準備をして、スムーズに取り組むことができました**。主に、スリランカの弁護士の職業団体である**スリランカ弁護士協会（BASL）**では、役員を6年、会計を2年、その後、副会長を2年務めました。弁護士協会は、法の支配と司法の独立を守ることを目的としており、若者や会員に専門的な経験やトレーニングを提供していますが、これらはすべてボランティア・ベースで行われています。この間、トレーニングの他に各地の法整備をしたり、裁判所施設を整えたり、地方で司法の独立が脅かされることがあれば声を上げる、という取り組みをしました。つまり、**弁護士協会はスリランカの民主化プロセスを促すという役割があり、私はリーダーシップを発揮することで、市民社会の実現を後押ししました。私のボランティア活動は、より職業とリンクしたものであったと言えます**。2009年、私は若手弁護士としての功績が認められ、JAYCEE（JCI）インターナショナルから「**スリランカで最も優秀な若手10人**」の1人に選ばれました。その後、私の弁護士としての功績がスリランカ大統領に認められ、私は大統領顧問弁護士（イギリスにおいても女王顧問弁護士という類似制度がある）に就任しました。



■ 法務大臣としての戦略と実行

現在はスリランカ国法務大臣として、法律の制定、インフラのサポート、刑務所の管理、憲法改正に伴う共同体の調和と国民統合に向けた活動など、司法行政にリーダーシップを発揮しています。就任後、短期間のうちに、次の4つの戦略を採用することで、国の司法行政全体を見直すための総合プログラムを策定しました。ここでも、「**綿密に計画を立て、実行し、フォローアップする**」という世界船の学びは間違いなく役に立ちました。

1. 制定法および法律の見直しと更新
2. 裁判官の増員、法廷施設、後方支援などのインフラ支援の提供と強化

3. テクノロジー活用の推進、特に司法行政デジタル化のための民間プロジェクトを立ち上げ
4. 司法長官部、法律起草者、政府アナリスト部など、司法行政をサポートする機関の強化

日常の小さな判断から、外交官として、弁護士協会の一員として、大臣としても、こんなふうに考えています。

「Vision without action is the day dream, Action without vision is the waste of time」(活動なきビジョンは空想でしかなく、ビジョンなき活動は時間の無駄である)。ですから、ビジョンを実現するためには戦略が必要で、戦略にはフォローアップが必要だと考えました。スリランカの法制度は、効率性ランキングで167位とされ、私はこれを上位50位以内に引き上げようと考えました。そのために、まず関心事を洗い出し、判事の数、裁判所の数、テクノロジーの活用、法改正の実施、支援施設の向上などを挙げました。そして戦略を立て、各課題に対してチームを発足させました。これらの活動と、世界船の経験すべてがリンクしているということではなくとも、**自分の意識下において影響しているものです。特に、良きリーダーとして「ただやる」ではなく、「よく計画し、よく実行する」ことができています。**世界船の経験を通して、日本各地、そしてシンガポール、南アフリカ、アラブ首長国連邦、タンザニアなど様々な国の発展の形を見たことが、「**自国を良くしたい」「他国ができていることを、自国にも取り入れたい**」という思いにつながりました。



■ 事業参加が全ての土台となる

この場をお借りして、日本政府と日本国民の皆様にご感謝申し上げます。日本政府は、私に若者としてこのような素晴らしい経験を積む機会を与えてくださり、私のリーダーシップスキルと知識を高める機会を与えてくださいました。迷うことなく言えることは、**この経験が私の土台となり、さまざまなレベルで国家建設、平和構築、和解に貢献するための素晴らしい基盤となっている**ということです。お互いの違いを橋渡しするため、他人の生活をより良くするために自発的に行動ができています。

このように振り返る機会をいただき、自分で思っていたよりも思い出は残っていると気づきました。世界船は、大変素敵な事業ですので、**将来の青年たちが同じような実体験ができるよう、継続を望みます。**そしてその機会を得た若者たちは、あらゆる方法でスキルを身につけ、意識下においても学び、自分を高め、人と繋がり、ネットワークを築くこと。そして学んだことを観察し、実生活に生かすことが必要です。私は日本の「カイゼン」という概念が好きなのですが、**絶え間なく良くすることで、人は昨日よりも今日の方がよい人間へ、そして今日よりも明日の方がより良い人間になっていきます。**ですから応募を考えている青年は、このチャンスを掴むこと、そして人生に一度あるかの体験の中で、自分の可能性をフルに発揮することが求められます。**世界船は、私の人生においても最高の経験の一つに数えられます。**

■「世界青年の船」参加者のネットワーク

当初、私たちはネットワークを継続するための国内外のメカニズムをいくつか持っていましたが、時間が経つにつれ、そのネットワークは弱まり、ほとんど消滅してしまいました。しかし私たちの当時の状況と比べれば、テクノロジーははるかに進化しています。オンラインでのミーティングであれば、毎年、または2年に一度、実施できるでしょう。最近では、気鋭の既参加青年たちの献身的な努力により、第8回参加者の間でもWhatsAppグループを作ったり、Zoomミーティングを月に一度行ったりしています。私自身はスリランカの事後活動組織と最近あまり連絡が取れていませんが、何年前か前につぼん丸がコロンボに寄港した時に、既参加青年に会うことが出来ました。

テクノロジーの進化はネットワーク継続の可能性を高めており、新しい参加回のメンバーの皆さんは、ネットワークを活用したより良い機会を作ることができるのではないかと思います。

モハメド・ウェイス・モハメド・アリ・サブリー氏のプロフィール

スリランカ国法務大臣。1992年から1995年、スリランカ・ロー・カレッジ在籍中、自治会や移民へのサポートを積極的に行い、政府機関である全国青少年サービス協議会のディレクターを経験。1995年度「世界青年の船」にナショナル・リーダーとして参加。1997年、27歳でサウジアラビア・ジエッダのスリランカ総領事に最年少で抜擢される。2000年に任期終了後、弁護士としての活動を続け、スリランカ弁護士協会においても弁護士育成と法整備支援に従事。2012年、スリランカ国大統領顧問弁護士に指名される。2020年より現職。